

## 若者たちとの絆

中村 龍介

二月も後半になるとかなり春めいてくる。近くの小公園の入口にある梅はほぼ満開だ。今日は春一番が吹いた。が、明日には寒さが復活するという。三寒四温というのは、本来冬の季語なのに、最近では春先によく見られる現象だとテレビでは解説している。

私の住むマンションのエレベーターでも、御近所の方と乗り合わせた時の挨拶は、「寒いですね」が、つい最近までの定番だった。確かに今冬の寒さは厳しかった。平均的にみれば地球は温暖化しているのかもしれないけれども、そろそろ八十に手が届くような老人には寒さが応える。特に、夜間自転車で塾に行く時の寒さは格別だ。

私はこの歳で受験生に英語を教えている。もちろん、塾講師は些かの収入になるが、教えることは自分の勉強にもなる。更に、若者たちと接点があること自体が私にとつての価値なのだ。将来の日本を背負って立つ若者たちに何らかのインプットができるのは大きな魅力である。

現在個別指導で教えている生徒は四人だが、そのうち一人は大学受験生、二人は高校受験生だ。受験シーズンを迎えて、今こそ最後の追い込みというわけで、連日、塾に向かっている。

私の通う塾は電車で二駅ほどの距離だが、我が家も塾も最寄り駅から徒歩十五分はかかるので、行くのは車か自転車となる。冬の間は出来るだけ車で通いたい、塾近くにあるコイン・パークは満車が多い。やむを得ず、路上駐車して何度か痛い目にあつた。駐車違反の罰金一万八千円に加えて反則点がマイナス二点。減点が五点に達すると三か月間の免許停止になる。

免許停止は形式的な罰則で講習を受ければ九十日の免許を一日に短縮するという救済措置がある。そのためには、朝八時半から午後四時半までの一日講習を鮫洲の教習所で受けなければならない。もちろん講習は有料だ。

余談だが、警察庁・交通局の財政は決して苦しいはずはないと推察する。「交通安全特別交付金」の歳入が年間で八〇〇億円ほどあるが、そのうちの七〇〇億円以上の原資が交通反則者納金らしい。これの増額を目的として、二〇〇六年から「監視員制度」を導入した。監視業務を民間に委託する制度である。警備会社などに業務を委託し、警備会社の職員が二人一組となって自転車で駐車違反を見て回る。緑のユニフォームを着た、みなし公務員だが、「みどり虫」と呼ばれて、ドライバーたちからは嫌われている。私の路駐を摘発したのも、みどり虫であつた。

そういうわけで、寒い日でも自転車で塾に通うことを余儀なくされるのだ。



帰りが九時を過ぎるような場合は、外気温度が一段と下がっている。ダウンジャケット、マフラーに皮手袋と完全防寒装備でも坂道を降りるときの風は刺すように冷たく、耳は千切れそうになり、皮の上からでも手の感覚を痺れさせる。我が家まで二十分足らずの距離だが、身体が凍りついてしまうには十分な時間だ。

そんな地獄の自転車通勤も今月が最後となる。塾のオーナー側の事情で、今月末、塾が閉鎖されるのだ。連日のゴールデンタイムが自分の元に帰って来る。それはそれで嬉しいが、反面、七年間続いた若者たちとの絆が断ち切れることには、一抹の寂しさがある。

来月からは自分の時間が随分出来る。それを何に使おうか。取りあえずは一人で山奥の温泉にでも浸かって暫く放心してみたい。

【二〇一七年二月記 原稿用紙約四・五枚 課題「寒い」】